

麗澤に学んで



平成 29 年度
麗澤高等学校

麗澤高校の道德教育

麗澤高等学校では、毎朝のショートホームルームにおいて、教室に掲げた『心のカレンダー』（本校の教育理念の根幹である「モラロジー」の内容を、カレンダー形式に31の格言にまとめたもの。公益財団法人モラロジー研究所刊）を生徒が読み上げることから一日がスタートし、週に1時間全クラスで道德の授業を行っています。この授業は本校の人間教育の大きな柱をなし、クラス担任が中心となって進めています。授業は、テキストである『最高道德の格言』（本校の創立者である法学博士廣池千九郎がまとめた格言集。公益財団法人モラロジー研究所刊）に掲載されている格言についての生徒による研究発表から始まります。これに続いて、「モラロジー」を土台として「感謝の心、思いやりの心、自立の心」を育むことを念頭に、教師がそれぞれの知識や経験に基づいて授業を展開します。

ここでは、平成28年度の高校3年生（6年生）が、道德の授業で発表した内容と「高校生活を振り返って」という題でまとめた作文の中から一部選んで掲載いたしました。道德の授業だけでなく、部活動や生徒会活動、寮生活や研修旅行などを通じて学んだ成果が表現されています。

高校生活を振り返って

6年A組 荒巻 理帆

私は、麗澤高校で3年間を過ごし、これから生きていく上で指針となるものを多く得ることができた。このように感じるようになったのは中学から続けてきた百人一首部での様々な経験からである。百人一首部では、高校になると中学生の時と比べても遙かに多くの人との出会いがあり、大きな大会に参加させてもらったことが自分の見識を広げてくれたように思う。4年生では、新入部員たちと切磋琢磨し合うことで、一人ひとりの部員が成長していこうとする姿を目の当たりにし、自分も前進することができた。また5年になると、私は部長に選ばれたが、先輩方のように部を率いていく力には自分にはないと痛感した。実際、先輩方のような指導力や牽引力は私には備わってはいなかったと思う。もし私が一部員ならば、私のような部長では嫌だっただろうなとさえ思っていた。しかし何とか部長としてやっていくうちに、少しずつ周りを意識して見ることができるようになり、そうすると先生方や後輩たちがいつも私を支えてくれていることに気づくようになった。つまりこの部活は常に相手を支え、助け合う雰囲気が存在しており、私が正面から向き合えば、いくらでも返ってくるのだということに気づくことになった。このように感じるようになってからは自分自身の部活に対する意欲も増し、全国大会に進み結果を残すという目標を掲げるようになった。部員全員で一つの目標を実現しようとする時、何が足りないかを明らかにし、それを補う努力をすることで、団体としても個人としても部は飛躍的に進歩することができたように考えている。結果は、予選で敗退し、悔しい気持ちがいっぱいになったが、この悔しさを仲間たちと共有できたことにより、より深い関係が築けたように思う。これも途中の過程が充実していたものであったから、結果を前向きに受け止めることができるのだと強く思うようになった。

また競技そのものを通して、私自身の内面を見つめ直す機会を得られたように感じている。団体としての力を底上げしていくのはあくまでも個人の力であり、そのためには、各自が内省することが不可欠となるからである。自分の力の伸ばし方を多方面から考えてみることは、強い選手になりたいという情熱を部活に注ぐことができたからに他ならない。成長していこうと努力することで、未知のものを知り得るのだということも部活を通して学ぶことができた。

部活以外でも学校生活を通して多くのことを学ぶことができた。5年生からのクラスは、それまで関わったことのない生徒が集まっていたため、スタートした当初は不安が先行していた。しかし毎日を過ごすにつれてクラスメートの温かさや優しさに心から感謝できるようになった。困った時や辛い時には常に力になってくれる人たちばかりであったことは、本当に恵まれた環境であり、また自分が何か働きかけることでそのことを喜んでもらえること自体本当に幸せだと感じるようになった。お互いを思いやり、認め合うことのできる雰囲気と同時に、各自の目標に向かって真摯に努力していくことのできる環境が共存した中で、共に過ごせたことは大変貴重な体験だったと思っている。このように私は、3年間の高校生活において、支え合いつつ向上していくということを身を以て実現することができたと実感している。このような貴重な気づきと体験ができたのは、先生方や先輩方、友人や後輩、そして家族の存在があったからだと思う。このことに感謝しつつ、卒業後の新天地で、より多くの学びを続けていきたいと思っている。

高校生活を振り返って

6年B組 栗田 碧

「麗澤は宝の山です」入学式でのちに私の部活動の先輩となる当時の生徒会長は、私たちにそう話しました。あれからの約2年半。今振り返ってみると、高校生活では数えきれないほどたくさんのお出来事がありました。そしてその度に知らず知らずのうちにあの先輩が言わんとした「宝」すなわち「新たな学び」を得てきました。その中でもとりわけ今後の人生に多大な影響を及ぼすであろう「宝」は以下の2つです。

一つ目は、「伝統」です。ここでいう「伝統」とは最高道徳の格言より、「神および聖人の精神を受け継いで、心遣いと行いの標準を示してくれた恩人の系列」を指します。麗澤に入学してから、道徳の授業、谷川研修、九州研修、皇居奉仕等、廣池千九郎先生に限らず先人の教えに触れる機会がたくさんありました。愚かにもその時は、「伝統」ということについて深くは考えておらず、私は今こうして作文を書きながら当時を振り返ってみて初めて、「伝統を祖述して義務を先行する」ことはとても大切なことなのだと気づきました。例えば、谷川には、麗鳳会のリーダー研修を含めて三回も訪れ、廣池千九郎先生の精神に触れました。それはとても有意義なことでしたが、実は私はもっと身近な存在である麗鳳会の先輩方が、どんなことを考えながら麗鳳会活動をしていたのかなどまったく知らないでいたのです。先輩方も歴代の麗鳳会役員の方の精神を受け継いでこられたのですから、麗鳳会活動に関する具体的な反省だけでなく、心遣いについてもやはり廣池千九郎先生と同じように学ぶべきだったと思います。実はこのことに気づいたのは、麗鳳会の任期が終了してからでしたので、とても残念なことをしたと思います。これからはこの反省によって学んだ「伝統」という考え方を常に意識していきたいと思っています。

二つ目は「光」です。私は演劇部に所属していました。中学時代、吹奏楽部員として舞台上に立っていた私は、照明の光が好きで、麗澤高校入学後、演劇部員として初めて携わる舞台上で照明の担当になりました。大会の日、調光室から見た舞台は、照明によって美しく、まるで夢のような空間になっていて、言い尽くせない感動を覚えたことを今でも忘れられません。その後、私は公演の度に益々照明という「光」に魅せられていくことになりました。私は、ある時は、自分が役者として舞台上に立ち照明を浴び、またある時は舞台監督として袖から舞台を見守り照明を一身に浴びて輝く役者の横顔を見つめました。ここでいう「光」とは、演劇部員の私にとっては文字通り舞台照明の光のことでしたが、もっと広く解釈するなら「そこで生きていたいと思わせるもの」でもありました。こうして私は照明という特別な「光」に魅せられて、演劇を続けることになりました。この間、思うように演技ができなかったり、副部長としてのプレッシャーに苦しんだりすることもありましたが、私には「光」があったことで演劇を続けることができました。人は何か一つでも自分にとって特別な「光」を持っていれば頑張ることができるのだと思います。これからはどんな状況に置かれても、とっておきの「光」を見つけて生きていきたいです。

麗澤で得たこれらのものをはじめとする「宝」を、これからも大切にしていきたいと思っています。そしてこの先の人生で、より多くの「宝」を得ていきたいと思っています。

麗高生活を振り返って

6年C組 下村 実央

母の母校の麗澤に憧れて入学してから6年が経ち、もうすぐ卒業を迎えようとしています。高校生活を振り返ってみると、寮に入ったことが私を大きく成長させたきっかけになったと改めて思います。学校から徒歩20分の距離に実家がある私が、入寮を決意したのは中学生の時の寮体験に参加したからでした。寮体験では高校生の先輩方の挨拶や言葉遣い、夕礼での凛とした姿に感銘を受け、親に甘えてばかりの自分を変えるには寮で生活するしかないと考えたからでした。

月日が経つのは早く、気が付けば卒寮まで残り約1ヶ月となってしまいました。立場が人を成長させるとの言葉通り、各学年に与えられた役割をこなすことで率先垂範の精神を学び、相手を思いやることの大切さに気付くことができました。例えば4年生であれば、同じ部屋の上級生のために気づかうことを覚え、寮生活に必要な土台を1年かけて身につけます。私の場合、家族に甘えて育ってきたので、入寮前は洗濯ひとつしたこともなく、両親の偉大さを痛感しました。上級生に対する礼儀を学んだ経験は、今後社会に出た時に役に立つと思います。5年生になると、下級生を指導することで、部屋っ子と共に成長することができました。妹がいない私にとって、初めてできた後輩は皆可愛く、優しく接したい気持ちもありましたが、縦の関係を大切に女子寮では、それは中々難しいことであり、下級生の成長を願いつつ、厳しく指導させていただくこともありました。前の年に上級生にして頂いてうれしかったことを、今度は下級生に伝え、恩送りができる人でありたいと考え、常に自分の言動に責任を持つと心がけました。5年生の3学期からは最上級生として寮長を務めさせていただき、少しでも女子寮をよくしたいという一心で尽力させていただきました。あと僅かで卒寮を迎えるにあたり、後悔することなく全てを後輩に託そうと思う一方、どこか寂しさを感じるのは、3年間の寮生活で学び得たものがかけがえのない宝物になり、女子寮を去る自分が想像できないからだと思います。残された僅かな日数も自分の役割を精一杯果たし、下級生に引き継いでもらいたいと考えています。

寮生活以外の日々の学校生活の中にも多くの思い出がありました。特に印象に強く残っているのが5年生の時の九州研修旅行でした。鹿児島県の知覧にある特攻平和祈念館に行き、若くして亡くなった特攻隊の兵士の写真を見た時、命の大切さや日々の生活の有難さを強く感じました。未来の日本の平和を願い、家族に別れを告げぬまま亡くなった兵士のことを思うと心が痛みますが、幸せな生活を送る現代に生きているからこそ、戦争を忘れてはならないと思いました。この九州研修では、実行委員を務め、他のクラス委員と共に事前に何度も打ち合わせをしました。最後に学年主任の先生から、今年の研修旅行は成功だと言って頂いた時、大きな喜びと達成感を味わうことができました。6年生の文化祭では、飲食の模擬店の運営に携わることができたことも、楽しくかつ大きな学びの一つだったと思います。

道徳教育を大切にしている麗澤で、6年間を過ごし、書き続けてきた「道徳ノート」は今も大切に持っています。「徳を尚ぶこと学知金権より大なり」は、私の一番好きな格言です。この言葉を忘れず、卒業後も人のために尽くせる人でありたいと思います。

高校三年間を振り返って

6年E組 山本 桜子

麗澤に入学して、もう三年間がたちました。私にとっては、あっという間のことでした。この三年間、失敗したことや後悔したことは、数えきれない程あります。その反面、多くの学びを得ることができ、また様々な思い出をつくることができました。

まず最初に、道德の授業を始めとする多くの学びがありました。私は麗澤の毎週の道德の授業が楽しみでした。学校の先生方に加えて、学校外からもたくさんの先生方がわざわざお見えになってお話をしてくださる機会が何度もありました。どのお話もこれからの私の人生にとって大切なものばかりだと感じ、有難く思いました。また通常の授業でも、様々な先生方から、私たちの将来にとっての大きな学びがたくさんありましたので、この学びを活かして、私自身の努力を続けていくつもりです。

次に部活動についてお話しします。幸いなことに、私は中学から始めた弓道を、高校でも続けることができました。中学時代の全国大会で味わった悔しい思いを活かし、高校ではインターハイ優勝を目標に、日々稽古に励みました。入学直後から数多くの大会に出場させていただきましたが、辛くなったことや、どうしていいのかわからなくなることがありました。それでも素晴らしい先生方や先輩、仲間、後輩など様々な人に支えられ、最後までやり続けることができ、結果としては、麗澤の弓道部としては初めて、関東大会ベスト16、東日本大会準優勝という成績を残すことができました。結果を残せたことはうれしいことですが、それ以上に、私はこれから一生弓道を続け、その中で弓道を通してお世話になった多くの方々に感謝しつつ、必ず恩返しをさせていただきたいと思っています。

三番目は、学校行事についてです。私には麗澤に入学したら、必ず参加させて頂きたいと思っていた行事がありました。それは、皇居勤労奉仕でした。私は自ら希望して、2回も参加させていただきました。皇居奉仕は、皇居の中を清掃するだけではなく、靖国神社に参拝し、遊就館を見学するなど、日本の歴史を学ぶ機会になりました。それがより深い自分自身の成長につながったと感じています。また皇居奉仕では、天皇皇后両陛下と皇太子殿下より、ご会釈を賜る機会があり、人生においてこの上ない貴重な体験をさせていただくこともできました。このような機会を与えていただけたことは本当に有難く、今後もこのような機会があれば、ぜひ参加させていただきたいと考えています。

最後に、高校3年間麗澤に通うことができたことは、両親のお陰だと感じる事ができました。私は日々両親には迷惑ばかりかけ、困らせてしまうことばかりだったと反省しています。卒業後には、必ず「ありがとうございます」と普段伝えられなかった感謝の気持ちを伝えようと思っています。18年間、私をここまで育てていただき、両親には本当に感謝しています。

私は、3年間、とても恵まれた環境である麗澤で過ごすことができ、心の底から良かったと感じています。卒業後も、麗澤での学びを活かし、人の役に立てるよう、また様々な人へ恩返しができるようこれからの人生を歩んでいきます。3年間お世話になりました。ありがとうございます。

麗澤高校 3 年間で振り返って

6 年 F 組 小澤 雅史

私がこの麗澤高校 3 年間で感じたことは二つあります。

まず一つ目は、部活動です。私は野球部に所属し、最高学年になった時には副キャプテンをさせていただきました。小学校時代から野球を始め、中学生の時は強い硬式野球チームに入りました。そのチームでは先輩や目上の方への礼儀や「勝利」に対する食欲さなど野球の技術や知識だけでなく、精神的な面まで学ぶことができました。麗澤高校野球部は、過去数年、夏の大会では初戦敗退であり、周りの人からも冷やかされることもあり、チームの雰囲気も決して良くはありませんでした。6 年生になった時、一学年上の代に比べて雰囲気は悪かったものの、今年のチームは個々の力が強く、野球に対する姿勢が良かったため、雰囲気と勝利は、自然とついてきたように思います。私たちの代にとって最後の夏の大会となり、相手は県内でも中々強い中堅校でした。試合の途中、相手チームに大量得点を与えてしまいましたが、「勝利」への執念で相手を揺さぶり、一気に点差を縮めることができました。とはいえ結果は二点差で敗退してしまいました。しかし今までの私の野球人生の中で、一番楽しく熱くなれた試合でした。「高校野球って本当にいい！」これからはもう全力で野球をやることもないと思いますが、今まで支えてくれた両親、小学生、中学生時代の監督やコーチの方に、高校を卒業してから、感謝の気持ちを伝えに行こうと思います。

二つ目は、麗寮です。入学式の前日に、この麗寮に入ってから、今までの間には、たくさんの思い出があります。その中でも、一番印象に残っているのが、礼儀と仲間です。入寮直後から早速先輩方からの指導が始まりました。毎晩毎晩怒られ続け、中学生の野球のクラブの頃に礼儀をたくさん学んでいたのも、自分はできると思い込んでいた自信を叩き直されたように思いました。最後は「うつ」の一手手前まで来て、母親と電話中に思わず泣いてしまいました。そんな苦しい時に、いろいろ助けてくれたのは、寮の同級生たちでした。同級生の誰かが先輩の指導を受けた場合、その原因や反省点をみんなで共有しました。また、4 年生全員で休日の朝食に行ったり、遠歩きの帰りに一緒に遊んで帰ったり、何をするにも自分の周りには寮の仲間がいました。とはいえ朝から晩まで血のつながりのない他人と三年間過ごすのですから、そんな仲間の中でもトラブルもありました。そんな時には、同級生で会議を開いて、互いのホンネを語り、解決方法を見つけました。たくさん笑い、たくさんふざけ、たくさん怒られ、たくさん泣いて、そしてたくさん支え合ってきたこの麗寮の仲間は、本当に兄弟のような、とても温かく、心地良い存在でした。こんな最高の兄弟に出会えて本当に幸せです。このように自分が今、幸せでいられるのは、寮生を応援して下さった先生方、先輩・後輩、そして自宅が遠いのにクラスや部活動の役員をしてくれた両親のお陰です。特に母親は、毎週部活動の練習試合を見に来てくれたり、足りないものがあるとすぐに荷物を送ってくれました。麗澤高校に入学して、麗寮に入寮して、広いグラウンドで毎日練習できる野球部に入ることができたのは、両親がいてくれたからだと思います。本当に感謝しています。

これから自分は受験勉強をして、さらに高いステージに向かっていかなければなりません。途中、苦しいと思うこともあるかもしれませんが、そんな時は、仲間を頼り、旧男子寮・新男子

寮、旧食堂・新食堂を経験した代として、後輩に良き伝統をしっかりと伝え、残り少ない寮生活の日々を充実したものにしていきたいと思います。またこの部活動や寮生活で吸収したものを社会人になった時に実践して、立派な人になります。

自ら運命の責めを負うて感謝す

6年A組 久保田 日和

この格言は、どのような困難に直面しても、人生を主体的、積極的に生きていくための心の姿勢を述べたものです。

私たちは、人生の中で、いろいろな問題や困難、思い通りにいかないことに遭遇します。その問題には、自分が原因で起こったものもあれば、そうでないものもあります。いずれにしても、自分の置かれた状況を恨んでも何も改善されません。また、同じような環境にあっても、人によって受け止め方は違います。例えば、恵まれた環境にあっても不平不満の心で空しい人生をおくっている人がいる一方で、逆境にあっても、感謝の心を持って力強く生き抜き、意義ある人生を送っている人もいます。

私はどちらかというと、この前者に当てはまるような気がします。空しい人生とまでは言わないまでも、恵まれた環境にしながら、ふとした時に、「どうしてこんなに勉強しなければいけないのだろうか」とか、「学校が遠くて嫌だ」とか、小さなどうでもいい不満が心に浮かんでしまいます。

では後者のような人は、どんな人だろうと考えた時に、私の頭に以前見た映画が思い浮かびました。それは「世界の果ての通学路」という映画でした。この映画は、道なき道を何時間もかけて通学する子どもたちを追ったドキュメンタリーでした。毎日象やキリンなどの野生動物が出没するサバンナの中、妹を連れて往復30キロの道のりを通う少年や、見渡す限り人のいないパタゴニア平原を馬に乗って通学する兄弟など、私たちとは比べものにならないほど大変な通学をしている子供たちのエピソードが紹介されていました。しかし彼らは、不満を一切口にしないどころか、とても楽しそうに目を輝かせていました。そして彼らは、夢を叶えたいから学校へ行くんだと語っていました。またアトラス山脈の中心部にある村から、毎週月曜日に全寮制の学校に片道22キロを徒歩で4時間かけて通学する少女は、こう言っていた。「私は、こんな遠い所から通わせてもらっている。家族や周りの人に本当に感謝している。だから人一倍努力して、絶対に夢を叶えたい」

彼らはみんなまだ11～12歳です。でも自分の置かれている厳しい環境を受け入れ、それを他の人より頑張ろうという力に変え、不満よりも希望を持ち、周りの人への感謝を忘れずに生きているのだと思います。そんな姿が、見た人に「かわいそう」とか「大変そう」ではなく、「楽しそう」「応援したい」という感想を与えたのかもしれない。

以上のように、厳しい状況に置かれても、それを運命だと受け止め、感謝の気持ちを持つことができれば、その方が思い悩んでいるよりも、前向きな気持ちになれるし、幸せな人生を送れるのだと思いました。私もあの子どもたちのように前向きに頑張りたいと思います。

苦悶の中に自暴自棄せず

6年B組 橋本 みれい

この格言は、人生の苦難に直面した時、悲観したり、自暴自棄になるのではなく、その苦難を自己の品性を向上させる絶好の機会と考え、感謝しながら前向きな態度で努力すべきだ、ということなのです。

私は、中学1年生から剣道部に所属していました。6年間剣道をやってきて学んだことが大きく分けて2つあります。

一つ目は、「継続は力なり、努力は裏切らない」ということです。私は、「個人・団体共に県大会に出場する」という目標を中学1年生の時に立て、6年間かけてようやく最後に叶えることができました。私は、6年間の剣道の練習において、一度も手を抜いたことはありません。「誰にでもできることを誰にでもできないくらいやる」「上手くいく時も、いかない時も、常に全力で取り組み、人よりも多く努力する」・・・このことを常に意識して練習をしてきました。「素振りにはみんなより必ず一本多く振る」「すり足は必ず女子の中で一番になる」「キツイ時こそ誰よりも声を出す」・・・こんな小さな事でも6年間続ければ、素振りにはみんなより何千本も多く振ることができたり、試合で何十分延長をやってもバテない足さばきができるようになるし、後輩や仲間に対して背中や姿勢で示すことができるようになりました。自分を追い込んで積み重ねた量しか信じられないと思います。このことを、私は、6年間一つひとつのことを続けてきたことで、いざ試合になった時、そして試合で不安になった時に、自分を信じることができるという体験で実感することができました。

二つ目は、「すべての出来事には意味がある」ということです。私は4年生の秋から6年生の春まで、一度も団体戦で勝つことができませんでした。周りの人たちがどんどん強くなり、上手くなって、最後の試合に向けて完成していく中で、一人自分だけがチームに貢献できていないという事実。一度も勝てなかった1年半の間、私は部活を辞めることも考えました。しかしそんな中で、私は頑張っても練習しても上手くいかなくて悩む後輩や仲間の存在に、初めて気づくことができました。不調だからこそ見える景色があると思います。私は自分が不調だからこそ、部長として、先輩として仲間として支えるべき周りの人たちの気持ちに気づくことができたのです。また、私は6年生最後の個人戦は、誤審で後輩に負けてしまいました。試合の後、悔し過ぎて自分の中で全く心の整理がつかみませんでした。その後続いた後輩の試合を見ながら、「なんであそこにいるのが自分じゃないんだ」と、とてもやるせない気持ちを抱きました。しかし、その日の午後に、男子団体の県大会予選の試合があり、その次の日には女子団体の県大会予選の試合があったので、私は団体チームのメンバーの仲をギクシャクさせてはいけない、男子のモチベーションを下げてはいけないと思い、後輩に対してもチームの仲間に対しても、全力で笑顔を作っていました。そんな時、かつて私の先輩が、私たち後輩に負けた時どんな気持ちだったのかについて、初めて分かったような気がしました。そしてたとえ同学年でも、私が県大会を決めた時、勝ち上がった時、先に負けてしまった人たちがどんな思いで私の試合を見ていたのか、初めて知ることができました。逆に私が県大会出場を決めた時、悔しさが無いはずはないであろうに、それを見せずに応援し、笑顔で祝ってくれたみんなは本当に素晴らしい人たちで、私は最高の仲間

囲まれているということを改めて実感することができました。

人には、どんなに自分が理解していると思っても、実際に自分がその立場にならないと分からないことがたくさんあると思います。私はそれを剣道部での6年間で何度も経験することができました。だから私は1年半勝てなかったこと、そして最後に後輩に負けたことは良かったことだと感じています。そのおかげで、今まで気づくことができなかつたことに気づくことができたからです。今まで経験してきたうれしいことも悔しいことも私にはすべてプラスだったと思えるようになりました。だから私はこの格言の説明にあるように、今まで経験してきたことすべてが自分を成長させてくれたと言えるような考え方や行動を、これからも続けていきたいと思いません。

断えず向上して終身努力す

6年E組 脇田 苑佳

この格言は、生涯にわたって道徳的努力を続けていくことの大切さを述べたものです。私は、いつも道徳の授業でクラスメートの発表を聞いていると、「この人はこんなことを考えているんだ」とか、「そういうものの見方もあるのか」などと、新しい発見がたくさんあって、面白いなと思っています。だから私は誰かと話することや、誰かの話を聞くことが好きです。

今まで聞いた話の中で、一番心に残っているのは、父がしてくれた話です。私の父は2人兄弟の次男で、長男である伯父とは4つ年が離れています。

ある日の夜、私がリビングで勉強していると、晩酌をしていた父が、ぼつりと呟きました。

「父さんはなあ、実は三番目の子供なんだ。」

一瞬、何を言っているのか分からず、私は黙り込んでしまいました。お酒が入っているせいか、父は一人で話し始めました。それは遠い昔の話で、父が生まれる前のことでした。伯父が生まれてすぐに、祖母は二人目の子供を授かりました。しかしその子供は予定よりもずっと早く生まれてしまい、亡くなってしまったそうです。それから何年かして、祖母はまた子供を授かりました。それが私の父でした。

父は、その後も話を続け、

「父さんの下には二人兄弟がいたんだ。」

今度こそ私は何も言えませんでした。その二人の子供も先の子供同様、生まれてすぐに亡くなってしまったそうです。そのことが、「かわいそう」なのか「みじめ」なのか私には分からないし、やっぱり何も言えませんでした。そして父は、最後にこのように言いました。

「俺は、自分が生まれてきたことには、絶対に意味があると思う。だから人生悔いのないように過ごせ。人との縁を大事にしろ。」

この話を聞いてから、私も「縁」というものを大事にしようと思いました。明日何が起こるか分からないかもしれませんが、今自分の周りにはいる人とは、きっと何かの縁があるはずだから、その人たちを大切にしようと思ったからです。そして自分の周りにはいる人たちを大事にするためには、道徳的な心づかいと行いを積み重ねていくことが必要であると学びました。この教室にい

る人たちとも、きっと何かの縁があると信じて、受験を共に戦っていこうと思いました。残り少ない日数ですが、頑張りましょう。